

り。お国めぐりのようだが、全体をつなぐ確かな糸として、すべてが「ギター」(またはリュート)奏者兼作曲家の作品であるところには選曲のポイントがある。曲目のうちには初録音のものも少なくなく、ギターリストの探究心を示しているが、それ以上に感じられるのは、それら「親しみ愛する弦」から生み出された諸作に対する、彼の瑞々しい共感である。タイトルの「シンプル・エッセンス」も、音楽家と楽器との出会いが生む純な感興を指しているのだと理解できる。右記の作曲家たちは時代を追ってではなく順不同に登場するのだが、それが不自然さを伴うことなく、先記のとおり一本の糸によりつながれている、と感じさせるところに、当盤の独特な魅力のゆえんはある。

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

推薦 マンドリン演奏界で国際的に活動する実力高い存在、柴田高明による独奏アルバム。初めと終わりの曲がもう一人のマンドリン奏者、吉田剛士とのデュオになっているのは、すべて無伴奏のソロ、そしてすべてがマンドリンのためのオリジナル曲である。マンドリン独奏のディスクと言ってもほとんどの場合ピアノ伴奏を伴うが、このようにマンドリンの響きのみで統一されると、なにか非常にすっきりとして快い。もとよりこのように感じさせるのは、柴田高明の演奏能力がたいへん高く、濃やかなニュアンスを生み出すことに長けているからにほかならない。最初のジョヴァンニ・バッティスタ・ジェルヴァジオ「ジェルヴァジオ」と記されているが、イタリア人なの(Gervasioはこう読むのが正しかろう)、次のガブリエル・レオーネは18世紀にひところ流行した初期ナポリ式のマンドリンにおける名演奏家兼作曲家で、彼らの楽曲には、こんなにちめずらしい当時のピリオド楽器が使用されている。ひなびた感傷をおびた主題によるレオーネの変奏曲など、古楽器の響きがなんとも言えぬ趣をもも出して心に残る。あとは後世の楽器による20世紀以降のイタリア、ドイツ、日本の作品だが、それぞれに興味ぶかく聴かれる。例のトレモロ奏法からは離れ、三味線風でありながら見事にマン・ドリオン化、した風味を示す桑原康雄の《じよんがら》は傑作と呼べよう。たいそう聴き甲斐のある、出色のマンドリン・アルバム。

石田善之 ● Yoshiyuki Ishida

録音評 十分な響きを行いながらも繊細な演奏。こまやかさも十分に取込まれている。2本のピーカーの中央にソロ展開するが、窮屈さのない豊かな空間を聴かせる。神奈川県立相模湖センターの響きを上に響きに活用しつつ、ギターの響きに合わせた会場の響きを聞きながら、機材楽器に不可欠な響き感もほどよく絶妙なバランスで整えている。(9)

き音のはげしさ、鋭さを求めるに飽きたらず、こうもギターを叩くのか……と言うのも一つの印象であった。バルトック・ピッツィカートは当然、ボンゴやコンガに変ずる楽器が心配だ。

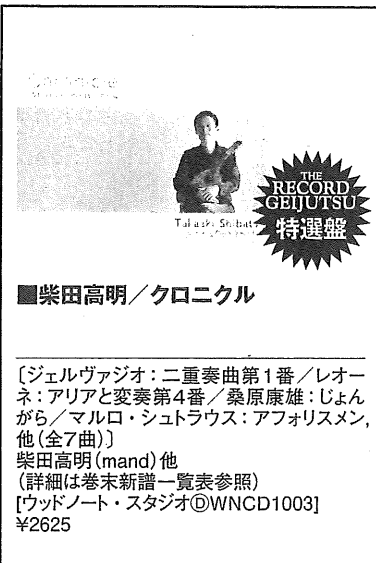
濱田三彦 ● Mitsuhiko Hamada

推薦 オリジナルのマンドリン曲、それも優れたものを多く集めて聴かせてくれる。タイトルのままに18世紀に活躍した古典期の名手による作品から、現存するマンドリニスタあるいは気鋭の作曲家たちの作品がまことにうまくミックスされ、よくある歴史的展開にのみこだわらない曲の配置が、飽きさせずに聴かせるといふ点からもなかなか考えられている。

奏者柴田自ら筆をとる解説も、わかりやすくこのマンドリンという楽器とその音楽のことを教えてくれる。ブックレットにはまた使用された楽器の写真もあり、古銘器その他の姿がわかるのもいい。それらの古楽器は共演者である吉田剛士所有のものもあり、そのふたりの二重奏が冒頭と掉尾をかざるのもまたいいものである。前記のごとく内容はいいが、気がつくともマンドリンには付きものともいえるべきトレモロ奏法が、大小経過して7曲めにして初めて耳に入るのであった。その音楽が単調なものなどではないことは解説にもあるが、マンドリンの世界を改めて見直し聴き直す人々もふえることであろう。筆者の好みとしてはやはり18世紀のジェルヴァジオ、レオーネといった人の音楽が耳に残るが、邦人作曲家桑原康雄、小林由直の名も記し直さねばなるまい。こんなに隆盛をきわめているかのギターの世界に先がけて、より華やかであった時代もあるこのマンドリンの世界なのだ。

神崎一雄 ● Kazuo Kanzaki

録音評 すぐ間近に座して演奏を聴く感じの録音。楽器の穴の響きもアルだし、ブックレットに詳しく紹介されている弾き分けられる複数の楽器の音色や響きの違いも実によく収められている。生々しい音で捉えられた楽器だがホールでの響きも適度に伴っていて、楽器自体の音は生々しいが硬質だったりドライだったりしてはいない。ガリバーホールでの2010年9月の収録。(90~93)



柴田高明 / クロニクル

【ジェルヴァジオ：二重奏曲第1番 / レオーネ：アリアと変奏第4番 / 桑原康雄：じよんがら / マルロ・シュトラウス：アフォリスメン、他(全7曲)】
柴田高明 (mand) 他
(詳細は巻末新譜一覽表参照)
【ウッドノート・スタジオ © WNC D1003】
¥2625